

博麗神社「闇」復興計画く狙われたJ〇巫女く

諸注意

- 本書は東方 project の二次創作です。登場人物、世界観など設定を一部お借りしていますが、原作者様とは関係ありません。
(げんだいいりのようななにかだよ！ どくじかいしゃく・どくじせつていにちゅういしてね！ おりきやらもいるよ！)
- 本書には性的、暴力的または非合法的行為の表現が含まれます。模倣した場合、刑事罰の対象となることがあります。また、本書には実際に模倣すると危険な行為の描写が含まれます。**(このほんにかいてあることをまねしてはいけないよ！ けいさつにつかまったり、けがをしたりするかもしれないよ！)**
- 本書の一部または全部を許諾なく複製、転載、アップロード、その他の方法で違法に利用した場合、法に基づく請求を行うことがあります。**(むだんでアップロードしたら、さいばんしょがきておかねをとられるかもしれないよ！)**

もくじ

| | | |
|-----|-------|-----|
| 第一章 | 帰郷 | 5 |
| 第二章 | 暗転 | 45 |
| 第三章 | 侵蝕 | 99 |
| 第四章 | 籠絡 | 135 |
| 第五章 | 密儀 | 197 |
| 終章 | 夏の終わり | 227 |

登場人物

霊夢

博麗神社の巫女。両親と祖母に先立たれて一人暮らし。市内の学校に通う傍ら、巫女として祖母から受け継いだ神社を守っている。

仁

霊夢の年の離れた従兄。一時期祖母の家で霊夢と一緒に暮らしていた。ここしばらくは国外で生活していたが、最近帰ってきた。

早苗

霊夢のクラスメイト。同じく実家が神社。

東風谷（父）

早苗の父。守矢神社の宮司で市議会議員。霊夢たちが通う学校の理事も務める。

谷垣（マーくん）

仁の友人。本名は正徳（まさのり）。

紫

博麗神社の宮司で霊夢と仁の祖母。故人。

第一章 帰郷

「……はあ」

長い石段を登りながら、霊夢はため息をついた。義務教育に上がってからこの方というもの、毎日毎日降りては登つての繰り返しだ。ひざ下まであるスカートの裾から覗く、ストッキングに包まれた己のくるぶしを一瞥して、霊夢は再びため息を漏らす。傍から見れば年相応、まだ肉付きが骨の成長に追いつかない、細い足だが、当人は日々石段の上り下りを繰り返すうちに太くなってしまっているのでないかと心のどこかで気に病んでいた。今更小高い丘の上の神社に生まれついた身を呪っても仕方ないとはいえ、いつそ空でも飛べたらいいのに。

石段を登り終えると、霊夢は古びた檜皮葺きの神社とその裏手にある我が家を見上げた。祖母が亡くなってそろそろ一年になる。祖母が残した家は広いばかりで古く、学生の身で一人暮らしをするにはどうにも持て余し気味で、掃除も大変ではあったが、霊夢は気に入っていた。小学生の頃は現代的な家で暮らす級友を羨んだことも

あったが、今となつては家族を思い出すすがも他にない。家族、親族と呼べる付き合ひも、今となつてはほとんど残つていなかった。

柄にもなく物思いにふけりながら玄関の引き戸に手をかけたところで、霊夢は違和感に気づいた。鍵が開いていた。三和土の上に見慣れない、男物の大きな靴が脱ぎ散らかされている。

「おかえりー、霊夢ちゃん」

玄関が開いた音に気付いたのか、廊下をぎしぎしと軋ませながら大柄な体が顔をのぞかせる。

「仁……？」

「……何よ今更。お祖母^{ばあ}ちゃんが亡くなった時にも顔を見せなかつたくせに」

「ごめんねー、なかなかこっちに帰つてこれなくて」

台所では、コトコトと煮える鍋から快いかつお出汁のおいが漂つていた。気楽な部屋着に着替えた仁は、エプロン姿で台所に立つ霊夢を茶の間から目を細めて眺めている。仁……本当は「ひとし」と呼びならわすが、周囲は「じん」と呼んでいた。ひと回り半ほど歳の離れた、霊夢にとっては従兄にあたる。物心つく前に父親を亡くし、次いで母にも先立たれて祖母と二人で暮らしていた霊夢にとっては唯一と言つていい身内で、小さい時分は

よくなついていた。

「それで？」

焼いた干物に作り置き煮物の煮物。おひたしに味噌汁と炊き立ての白飯。夕餉の膳をちゃぶ台の上に並べながら、霊夢はいぶかしげな視線を仁に向ける。相変わらず日に焼けた顔に、前にはなかったあごヒゲを蓄えている。袖なしTシャツから突き出した筋肉質の二の腕には、また入れ墨が増えていた。最後に会ってから何年経っただろうか。その間どこで何をしていたのか……すくなくとも日本にいなかったことは確かだ。

「……いただきまーす」

不審げな視線を一顧だにすることなく、仁は霊夢が皿を並べ終わるや否や箸を手を取った。小さく肩をすくめて、霊夢もちゃぶ台の向かいに座る。

「ごはん中ぐらいそのサングラス、とつたら」

「度入りだよ。外すと何も見えないんだ」もともと細い目を細めて、仁は笑う。「それに目の傷、知ってるでしょ」褐色のレンズの陰に隠れて、何を考えているのかよく読み取れない。何を考えているのかわからないのはいつものことだが。霊夢は肩をすくめて、自分も箸を手を取った。

「……食べましょ」

手を合わせていただきます、と頭を軽く下げる霊夢に、仁も倣う^{なら}。

「あり合わせて悪いけど」

「いや、美味しいよ？」

けらけらと笑いながら皿をきれいに平らげていく仁を眺めていると、少しだけ気分がほぐれていくのを感じた。そういえばこうして家で誰かと食膳を囲むのも、祖母が亡くなって以来だ。祖母も仁が帰ってくる度に、あれやこれやと霊夢に手伝わせてはちやぶ台に乗り切らないぐらいのおかずを作っていた……。

「……あのさ、霊夢ちゃん」

「え？」

「そうじつと見られてると、食べづらいな」

「……よく言うわ」

気が付くと、霊夢は箸を止めてじっと仁の手元を目で追っていた。内心のきまり悪さを押し隠すように大げさにため息をつくど、差し出された空の飯椀を受け取る。

「いい歳なんだから、ほどほどにしなさいよ」

「運動してるから大丈夫大丈夫」

「まったく……」

腕におひつからご飯を盛って返すと、仁は箸先でイカと炊いた里芋をつまみ上げたまま、何事か考えていた。

「どうかした？」

「いや……」

里芋を口に放り込み、喉仏を揺らして飲み込むと、仁は口角を持ち上げて笑った。

「はあちゃんの味がする」

「……そう」

夜。霊夢は一人自室のベッドに座っていた。湯上りの肌を開け放した窓から入ってくる風が心地よい。髪も乾かして、あとは寝るだけだった……普段であれば、寝つきはいいほうだが、どうにも胸騒ぎがして明かりを落とす気になれなかった。気分が落ち着かない理由はわかっている。一つ屋根の下にいる男だ。

霊夢の心中を見透かしたかのように、ドアがノックされた。霊夢が返事をするのを待つことなく、仁は部屋のドアを開けた。

「おじゃまします」

ノツクの音に身をそばだたせたのを気取られないように、霊夢はパジャマの襟を搔き合わせて闖入者を上目に見据える。仁は刺さるような視線を意に介することなく、無遠慮に室内を見回していた。

「あんまり変わらないねえ。あー、あれ制服？ 可愛いじゃん」

遠慮会釈なく、よく片付いた霊夢の私室を見回していた仁が、柵の上におかれたクマのぬいぐるみに目を止める。年頃の娘にしては殺風景な、よく言えば質実剛健な調度の中で、どこか不似合いに鎮座している。

「俺がドイツで買ってきたやつ？ これ」

大きな手のひらが耳にボタンのついたぬいぐるみを撫でている様は、熊がクマを愛でているようにも見えた。仁の目線の高さからは柵の上がよく見えたが、チリ一つなく綺麗に払われている。

「ちよっと子供っぽいかなど思ったけど……大事にしてくれてるみたいでよかった」

「……捨てるのももったいないから、おいてあるだけ」

「綺麗にしてくれてるじゃない」

「で、何よ」

ベッドに座ったまま、霊夢は仁の横顔を訝し気に見やっていた。

「こんな時間に。わざわざ部屋が片付いてるか見に来たの？」

「まさか」

興味津々といった体で部屋の中を眺めていた視線が、正面から霊夢の方を向く。眠たげに細めた目の奥で、値踏みするような鋭い眼光が鈍く光った。

「こんな時間に女の子の部屋に来て、何をすると思ったのさ」

身長で言えば頭一つ半、体重なら二倍はあるだろう仁の体が、古びたスプリングを軋ませながら苦も無く少女の肢体をベッドの上に押し倒す。

「んっ……」

ほんのりと湿り気を帯びたままの髪をシーツの上に広げながら、霊夢は抵抗らしい抵抗も見せないまま、ふさがれた唇の端から息を漏らす。

「……綺麗になったなあ、霊夢ちゃん」

口角を持ち上げて笑う仁から顔を背け、霊夢は目を伏せる。気の抜けたビール、煙草、そして男の汗の匂い。

「あんたに褒められてもうれしくないわ」

「そう？ 俺はうれしいけど」

仁の指が、額の柔らかな毛を撫でる。手のひらだけで霊夢の顔を覆い隠してしまいそうな大きな手。クマか何

か、大型の野生動物にもてあそばれているような気さえする。

「仁にいいのお嫁さんになるって約束してくれたじゃん」

「……バカじゃないの？」

目を背けたまま、それだけ言うのがやっとなかった。裏切られた、ずっとそんな気がしていた。ただそう感じるのが、無邪気になついていた相手に女にされたからだだったのか、それともそのあとでずっと離れていたからだだったのかは、今もわからない。はっきりしているのは、なぜかこの男には逆らえない。それだけだった。

「……ゴムぐらいしてよ」

鼻歌でも歌いそうな大きさで。パジャマの下に手をかける仁に、それだけ言うのがやっとなかった。

「あのころとは、違うのよ」

「ん。了解」

心得たとばかりに、仁は準備よくポケットから取り出したアルミ包装の避妊具を差し出す。

「ゴムじゃなくてポリウレタンだけど」

「どうでもいいわ」

「霊夢ちゃんがつけてよ」

「……出して」

もたもたとベッドの上に身を起こす霊夢を愉快気に見下ろしながら、仁はカーゴパンツの前を開けた。すでに膨れ上がったまま、下着の中に押し込められていた怒張が、打ち震えながら外気の中へとまろび出る。こもった汗と、青臭い雄臭の入り混じった匂いがつんと鼻をつく。避妊具の封を切り、先端に溜まった空気を舌で抜くようにしながら口を含む。体が動作を覚えているのが恨めしかった。薄いプラスチックの膜を口に含んだまま、霊夢は赤黒く膨れ上がった肉塊に顔を近づける。幼い記憶の中で勝手に膨らませていただけ。そう思い込もうとしていた仁の剛直は、あらためて目の前に突き付けられると、なにか圧倒されるような不安を覚えてしまう。そんな霊夢の心中を知ってか知らずか、唇と舌先の動きだけで器用に陽根に鎧をまとわせていく霊夢を仁は満足げに眺めていた。

「できた、わよ」

口腔が塞がれて鼻で息をするしかない。勢い、股座から漂う雄の臭いを鼻腔いっぱい吸い込みながら、何とか霊夢は陽茎の根元までをくわえ込むようにして避妊具をつけ終えると、顔を離れた。にやにやと余裕めいて笑う仁とは裏腹に、いまや遅しと打ち震える肉棒は、半透明のプラスチックに包まれてむしろ肉々しく目に映った。

「んん、相変わらず上手だねえ」

「言ったでしょう？ 褒められてもうれしくないって……」

唇を袖口で拭いながら恨めしげに見上げる霊夢の後ろ髪を、クマのような手が不器用に撫でる。顔を離しても、まだ鼻にあの頭をくらくらさせるような匂いが残っている気がした。

「はは。んじゃ、お返しだ」

「え、ちよっとっ」

仁の腕が軽々と霊夢を抱き寄せ、霊夢はベッドの上で尻を突き出した格好にさせられる。

「待ってよ……んっ！」

パジャマの下とショーツを一緒くたに引き下ろされ、外気の冷ややかに震える柔らかな内腿に、もどかしく指が触れる。

「あれ？ いきなり突っ込んでもらえると思ってた？」

「そんなわけ……んっ、んくっ」

ごつごつとした手に似合わない繊細な指使いで、仁が霊夢の秘唇を撫でる。透き通るように白い双臀の間、うつすらと繊毛に覆われた秘裂からその上でしめやかに窄まった秘蕾までをさらけ出したまま、霊夢はぎゅっと身を縮こまらせる。

「……久しぶりだからさ、ちゃんと慣らしてあげないとあつて」

「うう……」

「それともアレかな？ もう霊夢ちゃんもお年頃だし、その辺の男つかまえてパコパコやりまくりかな？」

「そんなわけっ、ない……でしょ……」

目尻に涙を浮かべながら、ようやくのことで霊夢は背後を振り返る。

「こんなこと、するのっ……あんたくらい、よっ……」

咎めるような視線を楽し気に受け止めながら、仁は笑う。

「嬉しいなあ」

「何がよ……」

「ん、霊夢ちゃんもすっかり女らしくなったなあつて」

「ッ……!」

「おまんこもふつくらして、お毛毛もきれいに生えそろつて……つるつるだったのにさ、この辺とか」

「見ないでよ……」

指の腹で、うつつすらと繊毛に囲われた秘裂の縁をなぞりあげられ、霊夢は嗚咽を漏らす。触れるか触れないか

の絶妙な指使いで、陰唇から難先の肉に埋もれた茎までをくすぐられるたびに、腰が跳ねそうになる。秘部から尻の穴までをさらけ出したまま、自分でも恐る恐るしか触れたことのない部分を好き放題にもてあそばされて、恥ずかしいのに、苦しいのに、それでも蜜を溢れさせてしまう自分の体がどうしようもなく恨めしかった。

「こんなに綺麗なのに、見ちゃダメなんていわれてもねえ。もったいないよ」

「待って、そこ……」

「ほら、お尻の穴だつてつるんとして可愛いのに」

「はあうっ……」

絡んだ蜜をなじませるように、指の腹がひくひくと震える肉色の窄まりに触れ、苦も無く第一関節までを腸の中に滑り込ませる。

「ほら、こんなにキュンキュンしてる。お尻の穴も喜んでるよ」

「あんたが……勝手に……っ……んあっ！」

器用に指で前後の穴を内側からなぞり立ながら、けらけらと仁は笑った。

「そういうえば霊夢ちゃん女子校だもんねえ、おしりもおまんこも貫通済みの変態っ娘だつてお友達は知らないか

あ」

抗議しようと尖らせた口からは、代わりに悲鳴めいた嗚咽が漏れる。膣と肛門の間の薄い肉壁を指の腹ですりつぶすようにくじり立てられながら、霊夢は跳ねそうになる腰を必死に抑えていた。

「やっぱり責任取って霊夢ちゃんには俺のお嫁さんになってもらわないとねえ」

「何を、勝手なっ……」

くちりと粘ついた音を立てて、陰裂から野太い指が引き抜かれる。次の瞬間、なにか熱くて固い塊が濡れそぼった陰門に押し当てられた。伝わる熱に、思わず霊夢は身をすくめる。

「大丈夫大丈夫、ゆっくりするから」

「あ、あ、あうっ……」

優し気な口ぶりとは裏腹にがっちりとした少女の細い腰を抱え込んだまま、仁が腰を送る。程よく潤っているとはいえ、成熟しきってはいない柔肉を赤子の腕ほどはあろうかという剛直がぎりぎりとして押し広げていく圧迫感に、霊夢はとぎれとぎれの吐息を漏らす。

「んむっ……」

じりじりと膣肉を押し広げながら最奥に達した肉槍が、とんとんと静かに子壺の底を叩く。下腹に響く振動に、思わず甘い声を立てそうになるのを、枕を食んでこらえる。感じている、などと思われたくなかった。振りほどい

て、股間を蹴り上げてやればいい。頭ではわかっているはずなのに、何年振りかに雄オスの逸物を受け入れた膾肉はきゆうきゆうと媚びるように蠢き、肉壁の天井をなぞり立てられるたびに脳の芯が痺れるように甘くうずいた。

「大丈夫？ つらくない？」

「そう思うなら……抜いて、よっ……」

「ごめん、気持ち良すぎて無理だわ。生だったら出ちゃってたかも」

耳元に顔を寄せてうそぶきながら、仁は手をバジヤマの裾から霊夢の胸元へと滑り込ませる。

「はー、すべすべだなあ……ふふっ」

「何笑ってんのよ……」

「おっぱい大きくなったなあって」

「当たり前っ……よ、この変態……」

「おや？ 何か勘違いしてるかな」

「んんっ」

片腕で霊夢の腰を抱え込んだまま、もう片方の手のひらで両の乳房をふにふにと揉みしだきながら、仁がささやく。

「俺は小さくても大きくても霊夢ちゃんのおっぱいが好きなの」

「……知らないわよ、そんなの」

「知ってほしいなあ」

パジャマの下で、形よく張った胸をやわやわとこね回しながら仁は悦に入ったように笑った。

「小さい子が好きなだけのロリコンだと思われるのは悲しいからねえ」

「……やってることは同じでしょ、最低」

「まあね」

「ッ！」

仁が指の腹で、ほのかに充血した乳首をはじく。精一杯の虚勢を張ってはみても、強く、弱く、解きほぐすように胸に触れる大きな手のひらはほのかに温かく、張りつめていたはずの肩の力が勝手に抜けていく。

「お、少しなじんできたかな？ そろそろ動いても大丈夫？」

「勝手にすればいいでしょ……さっさと終わらせてよ」

「ん、わかった」

「んんっ……！ ちょっと、何……をっ」

「いやあ、俺も長くは持ちそうにないからさあ」

再び尻の穴にねじ込んだ指が、膣を押し広げた剛直を腸壁越しになぞりあげる。

「俺ばっかり気持ちよくなつちや申し訳ないし。霊夢ちゃんこれ好きだったでしょ、お尻ほじられながらするの」

「ばか……やめっ……」

口答えする暇を与えずに、ゆっくりと仁が腰を引く。振り返った雁首が肉襷を絡ませるようにして引き抜かれていく感触にぞわぞわと背筋が泡立つ。

「この辺だったかな？」

「いやッ、だめッ……やめ……！ あんっ」

「ははっ、当たり前だ」

押入れから引つ張り出してきた古いおもちゃを検めるような軽さで尻穴から胎内を探りながら、仁は腰を送る。膣肉を剛直で限界ぎりぎりまで押し広げられるだけでも意識が飛びそうなのに、敏感な粘膜を体の内側から弄ばれる異常な感触に、視界がちかちかと明滅を始める。

「あひっ、あはっ、はうっ、あがっ……？」

「はは。だんだん思い出してきたかな」

膨れ上がる陽根がまるで爆発するように熱を帯びて感じられる。

「んっ」

「ひっ、はっ、はうっ……」

避妊具越しでも、脈打つ肉茎からどくんどくと精水がほとぼしるのがはっきりと感じられた。尻穴が一人がっつてにねじ込まれた指をきゆうきゆうと締めたて、膣肉がまるで尿道から精液の最後の一滴までをすすり立てるように脈動する。

「……あう……」

ずるりと粘ついた音を立てて陽根が引き抜かれた瞬間、霊夢は尻を突き出した格好のままひれ伏すように崩れ落ちた。熱を帯びた肉槍にふさがれていた秘肉が外気に触れる空寒さに、齒の根がかたかたと微かに震える。

「あー……でたわあ……やつぱり溜まってたな結構」

ベッドの上へあたり込む霊夢を尻目に、仁は平然とした表情でまだ赤黒く腫れ上がったままの肉茎から覆いを外していた。

「生でしてたら一発で孕ませてたな」

「はあ……あはっ……？」

霊夢の視線に気づいた仁が、見せびらかすようにコンドームに溜まった精液を左右にゆらす。白く濁った精液は先端のふくらみに収まり切らず、薄いウレタンの膜は水風船のように膨れている。

「ん？ 欲しい？ 飲む？」

「……冗談、でしょ……」

息を整えながらやつのことでそう答えるが、うつろな視線は勝手にクズかごとく消えていくそれを追っていた。あんな量の精液をそのまま出されていたら、本当に……妊娠させられていたかもしれない。その可能性を意識した瞬間、下腹が飢餓感にも似て鈍くうずいた。

「霊夢ちゃん」

名前を呼ばれて、ぼんやりと左右に揺れていた視線がすつと声の方を向く。

「……覚えてる？」

お願いでも命令でもなく、それはただの確認だった。力の入らない足を引きずるようにして、霊夢は仁の方に向ける。

「……んむ、んっ……んくっ」

仁の股座に顔を埋めるようにしながら、ようやく萎え始めた陰茎に舌を伸ばす。唾液と絡めるようにしながら、

雁首ににじみ、尿道に残った精液を吸い立て……飲み下す。

「いい子だ」

「……言ったでしょ」

頬を撫でようとする手をかぶりを振って振り払い、なけなしの氣勢を張って正面から仁の顔を見上げる。

「そんなの褒められてもうれしくないって」

「ははっ」

呵々と相好を崩すと、仁はベッドを降りた。

「俺、風呂入ってくるわ。一緒に入る？」

「……疲れたから寝る。明日学校だし」

「疲れさせちゃったかぁ。ごめんね」

「さっさと行きなさいよ……」

「はは」

ドアに手をかけながら、仁はあっけらかんと笑う。

「おやすみ、霊夢ちゃん」

仁が風呂に入ったのを見計らい、もう一度歯を磨くと、霊夢はベッドに戻った。

「……」

明かりを消すとどっと疲労感が襲ってきたが、目だけは妙に冴えてしまっていた。脚の間に物が挟まったような、まだ何かが入っているような、錯覚めいた違和感がして落ち着かなかった。歯も磨いて口もゆすいだのに、舌先と喉奥に何かが絡んだような、いがらっぽい後味が残っている。その代わりに、あの下腹に感じた飢餓はいくらか和らいでいた、ような気がした。

「……最っ悪……」

「はあ……」

トイレの便座に腰を下ろしたまま、霊夢は気の抜けたため息をつく。嘆息が出るのは身勝手な同居人のせいか、あんなことがあってもいつも通りの時間に起きて、ついつい二人分の朝食を用意してしまう己の甘さの故か。

別に用を足したいわけではなかった。狭いところに座って、落ち着いて考え事をしようとするところしかなかった。昔からそうだった。大きな凶体をして、どこにでも涼しい顔をして入り込んでくる。その当人はまだ寝てい

るのだろう。いい気なものだ。

客観的に見ればろくでもない男なのだ。いい年をしてフラフラと、どこに住んでいるのか何をしているのかもはっきりしない。連絡だつて放つておけば何年も音沙汰なしだ。あまつさえ、一回りも二回りも年の離れた親類の娘に手を出すような、訴えられていないだけの犯罪者。けれど祖母は何かと仁のことを気にかけていた。両親と折り合いの悪かった仁を家に住まわせ、成人してからも帰つて来れば何かと世話を焼き……。

昔のことを思い出しても仕方がない。あまりゆっくりしていられる時間でもない。霊夢が便座からわずかに腰を浮かせた瞬間、廊下の方からどたどたと騒々しい足音が響き……ドアが開いた。

「あ、いた。おはよう霊夢ちゃん」

「……三つ数える間に出ていって」

浮かせかけた腰を戻すと、霊夢は鍵をかけておかなかつた己を内心で呪いながら闖入者をにらみつける。

「きのう聞き忘れたんだけど、この家コーヒーっておいてなかつたっけ」

「ないわよ！ 早く出てって！」

「まあまあ」

刺さるような視線を気に留めることもなく、仁はトイレの中を見回す。

「やっぱ新しくなってるんだねえ……あ、お湯出るやつ付いたんだ」

「ちよっ、勝手に……!」

狭いトイレの中に身を潜り込ませるようにしながら、仁が温水洗浄便座のリモコンを押す。

「何勝手に押してるのよ……! 止めて!」

「いや、ほら。きれいにしとかないと」

「……んんっ……」

たくし上げた服が濡れてしまいそうで、うかつに動くこともできない。肩をひそめて尻の谷間に吹き付けられる生暖かい温水の感触をこらえる霊夢を、仁は楽しそうに見守っている。

「止めてよ……」

「(こいこい)」

「違っ……!」

そっとほけた風を装いながら、仁が強いのボタンを押す。普段使わない強さの水流がほじくられた記憶も新しい敏感な粘膜を刺激し、霊夢はぎゅっと身をすくめる。

「止めてってば……お願い……」

「はは、ごめんごめん」

ようやくのことで停止ボタンが押され、腰下で耳障りな機械音を立ててノズルが収納される。

「いやいや、この家もちゃんと新しくなってんだなあと思うとき、なんか感慨深くて」

「このっ……」

「霊夢ちゃん便秘してない？ いろいろこしてる？」

「あんたに関係ないでしょっ！」

「あるよ」

「ちよっ……」

唐突に仁はボクサーブリーフの前を開け、荒く息をつく霊夢の眼前に赤黒い抜き身をさらけ出した。

「なにこんなところで出してるのよっ」

「トイレでちんちん出すのは普通でしょ？」

「そうじゃなくて！」

話がかみ合わない。亀頭に顔が映りそうなくらいに勃起した一物を突き付けながら、仁はしれっとした顔で顎をなでる。

「ほら、俺としては霊夢ちゃんには心身ともに健康でいてほしいわけですよ。末永く」

「……体はともかく心の方はおかしくなりそうだな、今にも」

皮肉をぶつけてみても、仁は意に介するふうもない。いつまでものれんに腕押しの間答を続けていても仕方がない。朝っぱらからこんなことに付き合わされるのは酌だったが、霊夢は心の中で両手を上げながらため息をつついた。

「……すればいいの？ 口で？」

「わかってないなあ」

まるで霊夢のほうが非常識なことを言っているかのように、仁はこれ見よがしに肩をすくめる。

「俺は霊夢ちゃんのお尻の穴を心配してるんだよ？ 昨夜は中途半端にしちゃったから、物足りないんじゃないかって」

「……本気で言ってるの？」

聞くまでもなくわかっていて。口元は笑っているが、眼鏡の奥で細めた目が鋭い眼光を放っている。こういう目をしているときの仁は誰が相手であっても自分の意を通す。

「霊夢ちゃんが女の子になった時も、お尻の穴なら大丈夫だねって言ってくれたじゃん？ 忘れちゃった？」

「……覚えてるわよ……」

忘れたい、けど。そう続けようとした言葉が、もごもごと口ごもる唇の中で立ち消える。仁はトイレのタンクに腕をかけ、霊夢の耳元に顔を寄せる。

「お腹の中、俺の精液でいっぱいにしてほしくない？ 昔みたいに」

耳朶をくすぐる息から顔を背けながら、脳裏に記憶が去来する。未成熟な体で、無分別にオスの精を受け止めたこと。初潮を迎えたばかりの頃、仁が買い置きしていた避妊具が無くなると、口で、肛門で、使えるところはすべて使って交わったこと。直腸に吐き出されてじんわりと広がっていく、熱い精液の感触……。戻ってこなければ、忘れていられたはずなのに。

「……昔の話は、やめてよ」

「わかった」

かすかな苦々しさをにじませる霊夢の頬に手を添えて、仁は正面を向かせる。

「霊夢と、お尻でいたいな」

「……うまくできるか、わからないわよ……？」

タンクに手を突き、霊夢は突き出すようにして仁に尻を向ける。たくし上げた制服のスカートと、膝の間まで引きおろされたストッキングの間で、張りのある引き締まった双臀が白く揺れる。

「ん、まだ濡れてる」

「ん……」

温水シャワーで濡れた尻の谷間を、仁がペーパーで拭う。水で濡れているだけとはいえ、幼児のように尻を拭かれる気恥ずかしさは年頃の娘でなくてもこらえ難いものがあった。霊夢がぐつと唇を噛んで屈辱をこらえていると、何か生暖かいものが尾のあたりに滴り落ちる。

「ふふっ、相変わらず綺麗だなあ」

「んくっ」

尻の谷間に垂らした唾液をなじませるように滑らせていた指が、つぶりと肉蕾の芯へと潜り込む。排泄器官を弄ばれる背徳感と、太い指が粘膜をこすり立てながら筋輪を押し広げていく生理的な圧迫感がないまぜになって、少女の細い背中をぞわぞわと震わせる。何の銜いもなく、少女の肛門を指で伸ばすように弄びながら、仁はにやにやと笑っている。

「弾力があって、きゅつと締めてきて……素敵なお尻だねえ。うんちするだけじゃもったいないよ、やっぱり」

「……いちいち、んっ……言わなくてっ……んぐっ、いい……わよ！」

「ははっ、ごめんごめん」

「……んむっ……？」

尻の穴を指でもてあそびながら、仁が霊夢の口をふさぐ。ざらついた舌とごつごつとした指とに、入り口と出口から体内をまさぐられながら、霊夢は流されないように必死に自我を保とうとするが、やがて脳の奥がふわふわとし始める。

「はあっ……あーっ……あはっ……？」

「塞いでないかどうかにも余計なことをしゃべっちゃってね、この口が」

「ああ、んっ……！」

唇が離れ、次いで指が尻穴から引き抜かれる。指の腹がひり出される瞬間の、排泄にも似た解放感に体が勝手に甘えた息を漏らす。

「うんうん。きれいきれい。具合もよさそうだ。これなら大丈夫かな？」

「……さっさとしてよ……学校、遅れるから……」

「あ、もしかして舐めてほしかった？ お尻の穴ペろペろしてっってお願ひしてみてよ」

「しないわよっ……」

「ん、残念」

「っ……」

指でほぐされ、ぱくぱくと息づくように震える尻穴に、はじけそうに熱い抜き身が押し当てられる。直に粘膜から粘膜へと伝わる熱に、思わず腰が引けそうになる。肛門はただの排泄のための穴であって、そんなものを入れるための場所ではないのだ。そんな当たり前のことも知らずに淫行に興じていたかつての自分を、幼心の無知に付け込んだ仁を心の中で呪ってはみても、体のほうが勝手に肛門挿入の衝撃に備えるように息を整え始める。

「入れるよ」

「はあ……あつ、かはつ、あうっ……」

「そうそう、上手」

がっちり両手で腰を抱え込むようにしながら、仁が秘蓄の芯に突き立てた肉槍を奥へと進ませる。

「はあああつ……、あがつ……あふっ……うううっ……!!」

括約筋が押し広げられるぎちぎちという振動が、背筋をさかのぼって脳を揺らす。視界がゆがみそうになる圧迫感を、無理やり息を吐いてこらえながら、霊夢は腸内へと侵入する雄の性器をじりじりと受け入れる。

「ん、入った」

「ッ！」

雁首の一番太い部分が二重になった肉輪を通り抜けると、つるりとあっけなく亀頭までが肛内に呑み込まれる。

「根本まではちよつと無理かなあ……でもこれはこれで気持ちいいんだよね」

「はあっ……んはあっ……」

霊夢は尻の谷間から背中が二つに裂けてしまいそうな強烈な圧迫感に息を喘がせる。仁は腰を抱え込んでいた腕を片方離すと、荒く息づく霊夢の下腹、臍のあたりをそつと撫でた。

「またゆっくり馴染ませてこうね。気持ちいいよ？ きつと……この辺かな。俺のチンポだったら結腸まで届くだろうし、奥の方でびゅびゅつと、いっぱい出してあげるね」

「ひうっ！」

直腸の奥深く、裏側から子宮を叩くように放たれる精液。そのイメージを意識するだけで、きゆうきゆうと不随意に括約筋が鳴動する。

「あれ？ 期待しちゃった？」

「……してないわよ！ さっさと、あうっ、済ませて……！」

「言い方」

「あうっ……」

顎を持ち上げるようにして、仁が霊夢の耳元に口を寄せる。

「もっと女の子らしい言い方、あるでしょ」

「うう……」

仁に乗せられるのは癪ではあったが、こんな状況に持ち込まれた時点で負けたも同然だった。

「精子……」

「ん？」

尻穴を貫かれる苦しきからか、卑猥な口上を述べさせられる屈辱のためか。目尻に涙をにじませながら、霊夢は首を巡らせて仁を仰ぎ見る。

「お尻に精子……だして……」

「ははっ」

呵々として笑うと、仁はねぎらうように霊夢の背中を撫でた。

「それでこそ俺のお嫁さんだ」

「誰がよ……」

「それだけ余裕があれば動いても大丈夫かな」

「んんっ、んあっ」

返しのついた矢じりが肉を裂くさまにも似て、反り返った雁首が肛肉を引きずるようにして引き抜かれる。浅く緩やかなストロークではあるが、きゅうと締まった肉輪が竿の一番太い部分に吸い付くようにして引き抜かれる、肉と肉とがごりごりとすり合わされるような衝撃は、頭蓋の底が直接叩かれるように感じられた。

「そうそう……上手上手っ……、ほら、ちゃんと力入れて締めてくれないと終わらないよ……？ 学校遅れちゃうんでしょ？」

「こっ……このっ……！！」

口の端に興を乗せながら、少しずつ仁は抽送を早めていく。にらみつけてやろうにも、すでに腰のあたりはぞわぞわと痺れて力が入らない。タンクにしがみつくようにして、上半身を支えるのがやっとだった。重たい陶器のふたが肛門に送られる肉槍の一突きごとにガタガタと揺れる。

「あー、いい……霊夢ちゃんのケツ……いいわあ」

「イきそうっ……なんでしょッ……！ さっさと、イって……！！」

「あー、わかる？ さすがあ」

仁がぐつと腰に力をこめ、肛門にねじ込まれた切っ先が膨れ上がる。射精が近いと、体の芯で理解した。こんなことは早く終わらせてほしい。それだけのはずなのに。

「んぐっ……」

「んんんんっ……！！」

尿道を通り抜ける精流が、括約筋を押し広げながら少女の腸へと注ぎ込まれる。

「あっ、あはっ……」

排泄のための穴を逆流する熱い精水の奔流が、じんわりと体の中へと広がっていくのを感じながら、霊夢は犬のように舌を出して息を喘がせる。

「まだ……出るの……？」

「あまりにも気持ちよくてさ」

なぶりつくされた粘膜にどくんどくと伝わる脈動がようやく収まると、仁は小便をした後のように身を震わせ、泡立つ粘液の絡んだ陽根をずるりと引き抜いた。

「霊夢ちゃんは？」

「気持ちよくなんか……ないわよ……」

肛門から陰茎がひり出される、自分の意志とは裏腹に排便させられているような倒錯的な感触。ぞわぞわと背筋を駆け抜けていく、歯の根が合わなくなりそうな慄きをこらえながら、霊夢は息を喘がせていた。

「？俺はアナルセックス久しぶりだからつらくなかったか、って聞いたつもりだったんだけど」

「……このくらい、なんでもないわよ」

耳が熱い。うかうかと乗せられてしまった自分に、無性に腹が立った。

「さっさと出てって」

「ふうん」

精一杯の強がりを鼻先で受け流しながら、仁はペーパーをひと巻き取って便座の上で突き出されたままの尻の谷間を拭う。

(……熱い……)

腸にひり出された精液がじんじんと熱く、体の中に沁みとおっていく。赤子のように尻を拭われる屈辱に唇を噛みながら、霊夢は下腹からじんわりと広がっていく甘やかな疼きを必死にこらえていた。

「……なんで付いてくるのよ」

「ん、俺も街の方に用事があったさ」

いつもの通学路。いつもの街並み。いつも通りの朝。股の間に物の挟まったような違和感と、隣をいているくその原因を除けば。シャワーを浴びて何もかも洗い流したかったが、そんな時間はなかった。下着だけ替えて家を出ると、なぜか一緒に仁も付いてきた。

「だいたい何よ、その悪趣味な服。並んで歩きたくないんだけど」

「よそ行きの、いまこれしか持ってなくてさあ」

仁はダークスーツに黒いシャツ、赤いネクタイというなりで霊夢の隣を並んで歩いていた。イレズミだらけの腕をさらけ出してうろろうろされるよりはマシだが、あからさまにチンピラめいた柄の悪さがにじみ出ている。顔見知りでなければ行き会った途端に回れ右をして別の道を通るだろう。

学校に近づくにつれて、道を行く中に霊夢と同じ制服を着た生徒の姿が増えてくる。

「うんうん」

「何よ、気持ち悪い」

行きかう女子生徒の姿を右に左に眺めてはうなづく仁に、霊夢が不審げな視線を向ける。

「女子校、セーラー服……いいねえ、あこがれるねえ」

「通報されるわよ」

「でもやっぱり霊夢ちゃんが一番かわいいな」

「それ以上何かしゃべったら私が通報するわ」

「それは困るなあ。お巡りさんに霊夢ちゃんがベッドの上でどんな顔をするかまで事細かに話さなきゃならなくなる」

「今すぐ犬のウンチでも踏めばいいのに……」

そうこうしているうちに、二人は校門からやや離れたバス停へと行きがかった。始業時間が近いので、乗客のほとんどを通学生が占めている。乗降口から降りてきた生徒の一人が、立ち止まって二人に目を止めた。

「……霊夢？」

朝の光の中で、長い髪が微かに碧みどりがかって揺れる。

「ん、おはよう、早苗」

「おはよう……えっと、そちらは？」

早苗、と呼ばれた少女は、戸惑いがちに霊夢の傍らに立つ大柄な男に目を向けた。

「……気にしないで。親戚のおに……おじさん」

「どうも、仁と言います。霊夢ちゃんがいつもお世話になっているみたいで」

如才なく人当たりのよい笑みを浮かべる仁に、早苗もつられて頭を下げる。

「……東風谷早苗、です。こちらこそ、霊夢さんにはお世話になってます」

「はは、ご丁寧にどうも。あれ？ 東風谷……もしかして、守矢神社の？」

「ええ、ご存知ですか？」

「有名ですしねえ、お名前はかねがね。そっかあ、早苗さんちも神社かあ。いえ、ね。自分はずっと海外にいたもので、ですから神社のほうは霊夢ちゃんに任せきりで、本当に申し訳ないんですけど」

「ふふっ……」

「ちよっと」

いつの間にか世間話に花を咲かせ始めた仁を、霊夢が肘で小突く。

「いつまで喋ってるのよ。……早苗も早苗よ。遅れるわよ」

「ああ、ごめんごめん」

芝居がかって頭をかいてみせると、仁は早苗に向けて会釈し、傍らの霊夢に振り返った。

「んじや、俺は行くけど。あ、そうだ。コーヒー買つといてよ。マンデリンがいいな」

「泥水でも飲んでなさいよ」

「ふふっ……」

二人の掛け合いを眺めていた早苗が、目を細めて笑う。最初に見せた不審の色は消えていた。

「仲、いいんだね」

「でしょ？」

「……そんなんじゃないわよ」

気が気ではなかった。昔からこの男は人当たりがいい。屈託のない笑顔に気を許すと……どこまでもずるずる付け込まれる。今だって、こうしてニコニコと笑みを浮かべているが……。

（気持ち悪い……）

替えたばかりの下着の中に、肛門からあふれた精液が滴り落ちてきている。

「ん？　どうかした霊夢ちゃん？　大丈夫？」

「……大丈夫よ。何でもないわ」

「そう」

仁は霊夢の肩に手を置くと、早苗に聞こえないよう、声を低めてささやく。

「朝っぱらから精子の臭いぶんぶんさせてること、お友達に気づかれないようにね」

「……！」

「？」

顔を真っ赤にして肩を震わせる霊夢に、早苗が訝かるような視線を向ける。

「ん？ いや、霊夢ちゃんにすっかりしたお友達がいてよかったねって話」

「ふふっ」

「行くわよ、早苗」

わざとらしく相好を崩す仁に、つられて早苗も笑う。霊夢はその手をひったくるようにして、校門の方へと歩みを進める。

「お勉強がんばってね」

仁は手を振って二人を見送りながら、ぽつりと独り言ちる。

「東風谷早苗ちゃん、か」

朝の光に目を細めながら、仁は校舎へと遠ざかっていく二人の陰を追っていた。

「あの娘がねエ」

第二章 暗転

一緒に登校した日の晩、仁は帰ってこなかった。そしてその次の日、霊夢が学校から帰ってくると鍵が開いていた。

「ちよっと、いるの？」

ふらふらしているのはいつものことだが、帰ってくるなら来る、来ないならこないで連絡ぐらいは欲しいものだ。二人分用意してしまった食事のことを思い返ししながら、文句の一つでもつけてやろうと靴を脱いだ瞬間、仁の靴の隣にもう一組、見慣れない靴がそろえておいてあるのに気づいた。よく磨かれた、高そうな茶色の革靴。男物だ。

「ん、お帰り」

客間の襖から顔をのぞかせると、気楽な部屋着姿の仁ともう一人、見知らぬ男が座卓を囲んで座っていた。

「ごめんなさい。……お客様？」

「どうも、お邪魔します」

仁よりは一回り若いだろうか。スーツ姿に派手な柄のネクタイをした男が、座卓に散らばった書類から目上げて会釈を返す。物腰は柔らかいが、脱色した髪と対照的に赤銅色に灼いた肌、耳と言わず鼻と言わず、顔中に重そうなピアスを開けている。室内だというのに、仁と同じく薄い色のサングラスをかけていた。見た目で判断するのは良くないとはわかっていても、どうにも警戒心がかき立てられる風体だった。仁の知り合いだろうか、どういう関係なのか。

「こちらはマー君。本当は正徳っていうんだけどね。ちょっと今相談に乗ってもらってるんだ」

「どうも。谷垣と言います。仁さんにはこちらこそお世話になってまして」

「んで、こっちが霊夢ちゃん。この家の家主」

「……どうも」

不自然なくらいに白い歯を見せて笑う谷垣に、霊夢も会釈を返す。そのまま茶でも入れようと踵を返しかけた霊夢の背中を、仁がいつになく厳しい声で呼び止めた。

「座ってよ。霊夢ちゃんにも関係のある話なんだ」

「この家と神社、抵当に入ってるんだよねえ」

「……は？」

霊夢が座卓の向かいに座るや否や、仁は直截に切り出した。

「抵当って……どうということよ……？」

「この家も土地も神社ももう霊夢ちゃんのものじゃないってこと。このままだと取り壊される」

他人事のように淡々と繰り出される言葉が、ぐるぐると頭の中を回る。亡くなった両親と祖母から、いやその前からずっと代々引き継がれてきた神社。祖母が亡くなって、霊夢ひとり残されても、いつか成人した時には受け継ぐものだと思っていた。その日のために、学業の合間を縫って掃除をして、御祈祷もして、ずっと大事に守ってきたそれが……無くなる？

「僕の方から説明しましょう」

仁の傍らに座っていた谷垣が説明を引き継ぐ。後見人、固定資産税、意図的な滞納、差し押さえ、宗教法人格の剥奪、市の建築許可、善意の第三者……聞いたことのない言葉が、なにか自分とは違う世界の物のように遠く聞こえている。

「だって……そういうのは全部おばあちゃんが、弁護士さんに……」

「その弁護士が悪いやつでねえ、いや、マークんと昨日行つてとつちめてきたんだけど、ばあちゃんが残してくれた資産全部使いこんじゃって、この家いまお金ないんだよ。このままだと来学期の霊夢ちゃんの学費も払えないくらい」

「だったらその人から取り返せば……!」

「ただその弁護士が個人で流用した、って話じゃないですよ」

谷垣が座卓の上に散らばっていた書類をそろえて、霊夢の前に置く。建築計画。この家の住所。宗教法人格剥奪の通知。土地の差し押さえ。目を移すたびに、家の下に知らない間に大きな穴が開いていて、何もかもがその中に崩れ落ちていくような気がした。学校、友達、祖母と、顔もうつすらとしか覚えていない両親の記憶……古いけれども思い出の詰まった家。つつましく暮らしていた生活のなにもかも。

「……意図的に、この家と神社を乗っ取って潰そうとしている誰かがいる、というのが僕と仁さんの結論です」

「例の弁護士はそいつに抱きこまれた……いや、『抱かされた』ってというのが正解かな、たぶん」

「……嘘ではないのね?」

目を通した書類をそろえて座卓の向こうに返すと、霊夢はじっと仁の目を見た。

「俺が霊夢ちゃんに嘘ついたことある?」

「答えなさいよ」

ぬめつけるような視線にひるむことなく、仁は眼鏡のレンズをわずかにずらすと、正面から霊夢の顔を見た。糸のように細められた瞼の間で、冷やかな眼差しが試すように鈍く光っている。

「本当だよ、全部」

「……そう。で？」

細い肩を震わせて小さく息を吐くと、霊夢は言葉を継いだ。

「続きがあるんでしょ？」

「ははっ、若いに似合わずいぶんとしつかりした娘さんだ」

交わされる視線を傍らから眺めていた谷垣が、同じく冷たい光を目にのぞかせながら笑う。

「僕が仁さんにあんな目向けられたらチビっちゃいますよ。仁さんが執着するわけだ」

「惚れてる、って言ってほしいねえ」

「与太話はいいわ。私はどうすればいいの？」

「話が早い」

仁は向かいに座る霊夢に向けて、指を立てる。

「選択肢は二つ。一つ、この家と神社をあきらめて、俺と霊夢ちゃんですつましく二人暮らしを始める。まあ俺としてはこれもやぶさかでない」

「もう一つは？」

「けなげに一人で暮らす女の子に悪辣にも付け込んだ誰かの鼻を明かす。マーくんにも協力してもらってね。こう見えて彼、法律とか色々詳しいから。ただ……」

「ただ？」

「ちよっと危ない橋も渡るから、それなりの覚悟が必要だね。霊夢ちゃんにも協力してもらわないと」

「……なにをすればいいのよ」

「なんでも」

胡座をかいていた脚を組み替えて、仁が座卓の方に身を乗り出す。

「俺の指示にはすべて従ってもらおう。それがこの計画の条件」

「今でも十分好き勝手してるでしょ……」

「はは、ごめん。冗談だと思わせちゃったかな？」

口の端に笑みを浮かべながら、仁がすっと目を細める。

「でもこればかりは冗談じゃあないんだよ」

「この案件、下手すると僕らも川に浮きかねないんで」

「川に浮くって……」

天気の話でもするような気軽さで剣呑な言葉を口に乘せる男たちに、耳から音を立てて血の気が引いていく。

「まあ霊夢ちゃんみたいな純真な女の子には縁遠い話なんだけど、ガッツリ反社と市の偉いさんとそこそこデカめの企業が絡んでるわけなのよこの件。それでもやるか、っていう話でさ」

膝の上で握った手に、ぎりぎりど爪が食い込む。どうしてこんなことになった。問うてみても答えが出ないことはわかっていた。何が悪かったわけでもない。ただどこかの誰かのたくらんだ、何の力もない学生の身ではどうにもならない悪意のせいで理不尽な選択を迫られているだけだ。

「……俺だって心苦しいのさ、霊夢ちゃんにこんな話をするのは。できることなら平穩無事に今の暮らしをつづけて欲しいと思ってるよ」

「……でしようね」

ふうと深く息を吐き、内心の動揺を抑えつけながら、霊夢は答える。

「あんたが私をどうこうしたいだけだったら、こんな周りくどい話をする必要もないもの」

仁はびっくりと片眉を持ち上げると、静かに笑う。

「分かってるじゃない。で、どうする？」

「……やるわ」

「わかった。女に二言はないね？」

「あんなこそ、冗談で済ませるなら今のうちよ」

ぎり、と奥歯をかみしめながら、静かに霊夢は仁の顔を正面から見据える。

「……私を謀ったら承知しないわ」

「おっかねえ」

後ろ手にもたれて、仁は天井を仰ぎ見る。

「ばあちゃんに叱られたときのことを思い出すよ。目がそっくりだ」

「それで？ 私に何をさせる気よ」

「手始めにマーくんを抱かれてもらおうかな」

「……本気で言ってるの？」

わずかにまなじりが吊り上がるのを感じながら、仁から傍らに座る谷垣の方に視線を向ける。チンピラ然とし

た風貌の男は、押し黙ったままにやにやと軽薄な笑みを浮かべているが、レンズの奥の目は値踏みするように鈍く光を照り返している。

「マーくんさあ、いろいろと法律に詳しくて、今回もいろいろな相談に乗ってもらってるんだけど、弁護士バッジ持っていないからお金渡してあげるわけにいかないんだよねえ。俺はまあ身内だからいいんだけど、それなりに危ない橋を一緒に渡ろうってからはねえ」

天井の方を見上げたまま、仁が他人事のように独り言ちる。

「……まあ、手付金がわりにちょっといい思いをしてもらおうと思ってる」

「あんな……」

声が震える。どこまで人を辱めれば気が済むのだろう。女としての、あるいは人間としての最後の矜持だけが、ようやく目尻からこぼれそうになる涙を抑える。泣いてなどやるものか。

「霊夢ちゃんさあ」

唇をかんで肩を震わせる霊夢に、仁はぼんやりと天を仰いだまま静かに告げる。

「もう後戻りはできないんだよ」

畳敷きの上にベッドと机が置かれた霊夢の部屋。仁も体が大きい、それより一回りは小さいとはいえず、谷垣も男の平均よりは体格がある。そんな男たちと一緒に押し込められると、普段は気の休まる寢床もいかにも窮屈だった。それ以上に、乙女のプライベートに土足で踏み込まれるような嫌悪感が先に立つ。

「……なんであんたまで来るのよ」

「さすがに知らない人と二人きりじゃかわいそうかなって」

仁が目くばせすると、谷垣は上着を脱いでネクタイを緩める。細面な印象の外面にくらべると、服の下は意外にがっしりした体格をしていた。むらなく焼けた肌には、背中から二の腕に至るまで色鮮やかな文様が彫り込まれている。和彫りと言っただろうか。仁が入れている、抽象的なデザインのタトゥーとは違った印象を受ける。

「揃いも揃って……悪趣味」

霊夢はベッドに座って、ビキニパンツだけの裸体を晒す谷垣と隣の仁を横目に眺める。

「親からもらった体でしょ、大事にしないよ」

「マーくんも俺と一緒に、親にはいい思い出がなくてねさ」

「そういう話じゃなくて……」

「まあまあ、霊夢ちゃんも脱ぎなよ」

「くっ……」

震えてしまいそうになるのを押さえて、制服のタイに手をかける。二組の好奇に満ちた眼差しが、急かすでもなく囁すでもなく、じっと霊夢の指先を見つめている。半袖のセーラー服とプリーツスカートを、シワにならなように丁寧にたたんでベッドのわきに置くと、夏のまだ陽の高い時間なのに、空寒さに肌が泡立った。

「ブラも取ってね。パンツはまだいいや。あ、靴下もそのままで」

「……変態」

飾り気のない白のブラを外すと、形よく椀型に張った乳房が男たちの視線の中にもろび出る。内心の心細さを気取られないよう、背中を丸めて体を覆いながら、霊夢はじっと男たちの方を睨む。

「やるならさっさとやればいいでしょ」

「分かってないなあ」

やれやれと言ったふうには、仁は両掌を天井に向けて肩をすくめる。

「今日から霊夢ちゃんは俺たちの共犯者なんだよ？ 危ない橋を渡るってのはそういうこと。だ、か、ら……」

そこで仁は芝居がかった効果を狙ったように一呼吸置くと、後ろ手に持っていたクリアファイルを霊夢の方に出してみせた。

「何よ……それ……」

ファイルの中には何か薄いシート状のものが重ねて収められていた。その用途に思い当たった霊夢のこめかみが引きつる。

「せっかくだから霊夢ちゃんにもお肌でオシヤレしてもらおうかと思って」

「嫌よ！ そんなのっ」

「あー。マーくん、お願い」

「はい」

谷垣の腕が、有無を言わず霊夢の両手を頭上でねじりあげる。

「分かっているとと思うけど、あまり手荒にはしないでね」

「分かっていますよ」

もがいて逃れようとするが、振りほどくことができない。抵抗空しく霊夢はベッドの上につぶせの形で押し倒される。

「嫌！ やめてよー！」

「暴れないでよ」

両手を谷垣に押さえつけられたままベッドにうつぶせになった霊夢の後ろから、仁が両脚を押さえつけるようにして馬乗りになる。

「大丈夫大丈夫。これ、転写してしばらくしたら消えるやつだから。一週間か二週間かな？」

「やだ……やだよ……」

涙声になって体をよじらせる霊夢の尻を、仁はぺちんとたしなめるように叩く。

「……あんまり暴れると、お肌が傷ついてほんとに消えなくなっちゃうかもよ？」

「うう……ひっ……」

「そうそう、いい子いい子」

押さえつけられたもの裏側に、仁の野太い手のひらが何かを張り伸ばしていく。

「仁さんそれわざわざ作ったんスか？」

「そう。マゾ奴隷の霊夢ちゃん、と。反対側のあんよは俺の名前ね。ちゃんと持ち主の名前書いておかないと」

「誰が奴隷よ……！」

「ん？ だって俺の言うこと何でも聞くって言ったじゃん」

抗議の声をものともせず、仁は足からつんと張った双臀、背中から上腕へと、白い肌の上にタトゥーシートを

貼り伸ばしていく。

「あ、マーくんお水とって。濡れタオルで上から濡らして完了……つと」

「ひうっ……」

霊夢は小さく嗚咽を漏らす。ひやりと肌に触れる濡れタオルの冷たさ以上に、肌になにか薄気味の悪い物が刻まれていくという事実がたまらなく嫌だった。

「……それにしても絵柄、とっ散らかりすぎじゃないスか？ こっちはポタニカルだし、こっちはドラゴン、これは……なんすか、ケルト文様？」

「初めてだから色々試してみようかとおもってさあ。でも結構エッチな感じじゃない？ 肌がきれいだとやっぱり引き立つよね」

「人の体をなんだと思ってるのよ！」

「綺麗だなあって言ってるじゃん。きれいなものはさあ、やっぱり自分の色に染めたくなるよね。あ、マーくん上向かせてあげて」

あおむけに転がされた霊夢が仁を睨みつける間もなく、目の上に濡れタオルが掛けられる。

「あ、仁さんずるーい。なんかおっぱいのとこぼっかり丹念にやってないすか？」

「あ、わかつちやう？」

谷垣と軽口を交わしながら、大腿の前から下腹部、そして胸へと手を滑らせる仁の声を聞いていると、己の締めさに涙が出てきた。目が隠れているのが幸いと緩んだ目頭からあふれた涙が、生ぬるいタオルに吸われていく。仁が胸元、鎖骨のあたりまでタオルで拭い終わると、ようやく二人の男は霊夢の手足を解放した。

「どうかな」

「……意外と悪くないすね」

「まあ、マーくんみたいに本格的な仕上がりにはなっていないけど、良いんじゃないかな」

ひとしきり無責任な講評を交わすと、仁は姿見を霊夢の方に向けた。

「なんなのよこれ……」

焦燥しきった体をようやくの上でベッドの上に起こした霊夢は、鏡に映る自分の姿を見て絶句する。胸元にあるのは……黒猫だろうか。その下、臍のあたりには羽を広げた蝶。蝶の尾、下腹部を覆うように飾り文字で何か記されている。反転して読みづらいが、「SLAVE」という単語は見取れた。首の下から膝の上まで、自由帳を与えられた子供の落書きのように雑多な絵柄で埋め尽くされている。見えない背中側には何が描かれているか、知れたものではない。

「なんてことするのよ！ これじゃ学校もいけないじゃない……」

「へえ、まだ学校とか行く気でいたんだ」

仁はベッド脇に屈みこむと、足元から霊夢を見上げて平然とささやく。

「別に行かなくてもいいんじゃない？ 女の子は結局お料理とセックスが上手なら何とかなるもんだよ。霊夢ちゃん、どっちも得意でしょ？」

「あんたは……！」

「それより霊夢ちゃん、こつからが本番だよ？ 忘れてないよね」

落書きめいたタトゥーでおおわれた体を、それでも健気に手で覆い隠そうとする霊夢の手を除けるようにして、仁が指先で下着越しに鼠径部に触れる。

「んじゃ、パンツ脱ごつか」

「んっ……んむっ」

あおむけでベッドに横たわる谷垣の股座に顔をうずめて、霊夢は屹立したペニスにコンドームをかぶせていた。

「……ほんとにオマンコ頂いちゃっていいんすか？」

「うん、まあゴムしてくればね」

当事者をさておいて、二人の男は無責任な言葉を交わしていた。腹立たしくはあったが、途中で外れられても困る。唇をすぼめるようにして陰茎の根元にまでコンドームをかぶせると、霊夢は顔を離す。

「……まあ、いくら俺のお嫁さんになると言っても、ほかの男のちんちんの味も知らないんじゃないか可哀想だしね」

「仁さんのと比べられるんじゃないかあさすがに緊張しますねえ」

「誰が嫁よ……」

背後で身勝手なことを言う仁に促されるようにして、霊夢はためらいがちに谷垣の上にまたがる。薄いプラスチックの膜に覆われた怒張が、天井を向いたままびくびくと震えていた。知らない男。今日会ったばかりの男のペニスを受け入れる、という事実が、中腰になったままの膝を小さく震わせる。馬鹿な話だ。知っている男に犯されるならいいというわけでもないだろうに。自己憐憫に浸っていると、一人勝手に自嘲の言葉が浮かんでくる。そうだ。売られたも同然だ。

「んっ……んんっ……」

「おっ……」

半ば捨て鉢な気分のまま、ゆっくりと屹立したペニスの上に秘唇を沈めていく。わずかに湿り気を帯び始めた

肉襲が、ゆっくりと陰茎を押し包み、受け入れていく。ただの生理現象だ。濡らさなければ痛い思いをするだけだ。そう言い聞かせながら、ゆっくりと腰を揺する。

「あー……いいですねえ……なかなか味わえないっすよこのオマンコは……」

「だろぅ？」

なぜか得意げに語る仁を無視して、深くなりすぎないように膝を支える。谷垣のペニスには仁に比べればやや細身だが、固く当たたる感じがして、うかつに腰を落とすと腹が突き上げられそうになる。そんな感触の違いなんて別に知りたくもないのに。

「んん……んふっ……んあっ……？」

男の腰の上でもどかしく腰をゆするさまを後ろから見ている仁が、唐突に霊夢の背中を押す。

「な、なに……何する気よ……？」

「ごめん、霊夢ちゃん」

谷垣に抱きかかえられるようにして上体を倒した霊夢に、仁はスポンの前あきからさらけ出した抜き身を振りかざしながらにじり寄る。

「我慢できなくなっちゃった」

「ちょっと、あんた、まさかっ……………！」

「今度はちゃんとローション用意しといたから大丈夫かな？」

「へえ、ケツもいけるんすか？」

「ちゃんと『A F可』って書いてあるでしょ、このお尻」

「だめ、無理よそんなっ……………やめっ……………！」

有無を言わずに押し広げた尻たぶの間に、ひやりと冷たいローションが滴り落ちる。仁は谷垣と二人で霊夢の体を挟むように腰を寄せると、ペニスに刺し貫かれたままの秘唇の上、きゅうきゅうとうごめく尻穴に先走りの浮いた陽根をあてがう。

「無理……………無理っ！ 入らなっ、あっ、あがっ……………！」

「入ったよ？」

陰肉と連動して息づく尻穴の呼吸を読むようにして、仁が肉槍の切っ先を腸内へと滑り込ませる。

「へ、あ、あ、あ……………嘘……………？」

何が起きたのかわからない、とばかりに見開いた目を白黒させる霊夢の腕を掴んで、仁は己の方へと振り向かせる。

「あ、これマーくんのか。当たってるね」

「あー……さすが仁さんのだと反応が違いますねえ。敵わないなあ」

「霊夢ちゃんお尻弱いからね」

「何を、勝手に、ひぎっ、あっ、がっ……!」

どちらか一方だけでも苦しいのに、別々の穴からねじ込まれたペニスが体の中から肉壁をこすり立てる、異常なまでに強烈な名状しがたい感覚に、霊夢は息を喘がせる。折り重なった肉の壁のような男の体の間で、少女の体は半ば宙に吊られたまま木の葉のように揺さぶられる。

「ひぎっ、あはっ! かはっ、あっ、あっ、あがっ」

「分かる? 霊夢ちゃん。このくらいのペースで動いてあげないと男の子のチンポって気持ちよくなれないのよ」
ぎりぎりとお尻肉を押し広げながら揺さぶる仁の抽送に、釣られるようにして霊夢の膣肉が谷垣のペニスをしごき立てる。

「あー、それいいすね……精子登ってくる……」

霊夢の下で、谷垣は頬を弛緩させて肉壁がペニスに与える悦に酔いしれる。霊夢の方はそれぞれころではない。脳髓が痺れそうな息苦しさに、舌を噛まないよう唇を噛んでこらえるのがやっとなかった。前後から交互に腹腔を

突き上げられて呼吸もままならないまま、酸素を奪われた脳が立ち眩みめいて視界を明滅させる。

「すみません……先に、イキます」

「おう」

谷垣は目を閉じると、抱え込んでいた霊夢の腰をぐつと引き寄せて最後の一突きを送る。

「んぐっ……おっ……吸い付いてくるっ……」

「んんんッ……!」

コンドーム越しにもはつきりとわかる衝撃が、膣の最奥、子宮口のあたりではじけるのが感じられた。胎内で吐き出される射精の衝撃に、タトゥーで彩られた背中を震わせて悶える霊夢の腕を今度は仁が引き寄せ腸の奥へと腰を送る。

「あがつ、はひつ、無理ッ! もう無理……っ!」

「いいねえ、色っばいよ、それ」

リボンで結われた髪を振り乱し、けだものじみた悲鳴を立てて背中をのけぞらせる霊夢のうなじに、半ば嘔みつくようにして仁は口づけ。そのまま直腸の奥へと精を放った。

「……あんまり見せつけないでくださいよー、仁さん。自信なくしちゃいますよー」

「あー……？ さすがにハッスルしすぎたかなあ」

どくん、どくんと放たれる精液の脈動に、霊夢は汗ばんだ男の体の上にへたり込んだまま身を震わせる。屈辱と両穴挿入の衝撃になぶりつくされた精神が、眠りにも似たけだるさに塗りつぶされていく。

（ここ、私の部屋……なのに）

そうだ、シート、洗わなきゃ……。

神社の境内を掃き清めながら、早苗は物思いに沈んでいた。箒を握る手にも、力が入らない。先ほどから同じ石畳の上を履いてはまた寄せている。霊夢が学校を休んでいた。

珍しく参拝客の姿はない。箒を社務所の裏に片付けて、縁台に腰を下ろす。木々の梢を渡る夏の木漏れ日が肌に心地よかったが、早苗の気分は晴れなかった。

霊夢が学校を休んでいる。雨の日も風の日も、全校生徒の半分がインフルエンザでダウンした時も休んだことなどなかった。早苗の知る限り、休んだといえは祖母の葬儀の時だけだ。その時だって霊夢は悔みを告げに行った早苗の前で笑っていて、次の朝にはいつも通りの時間に教室の席に座っていた。その霊夢が、欠席している。

懐からスマートフォンを取り出して、メッセージの履歴を見る。

「……大丈夫。心配しないで……か」

二日前。それで連絡は途切れていた。学校には、しばらく休ませる旨連絡があったらしい。病気なのか、家庭の事情なのか、それは聞かされなかった。そもそも誰が連絡したのか……あの朝、霊夢と一緒に歩いていた男の人。親戚と言っていたが、どういう関係なのか。思えばなにか様子がおかしかった……ような気もする。

考えすぎだろう。霊夢だって調子が悪い時くらいある。大体まだ三日やそこらだ。ざわざわとくすぶる胸騒ぎを押し殺してスマートフォンをしまうと、参道の方に、歩いてくる人影が見えた。早苗は慌てて袴を整え、立ち上がる。

「え……?」

「やあ、どうも。早苗さん……だよね?」

鳥居の下で律儀に一礼して参道を歩いてきたその人影は、早苗に気づくとにこやかに笑いながら片手をあげた。

「えっと、あの……確か、霊夢さんの、おじ……」

「たは、おじさんかあ」

確か仁といただろうか。男は早苗の声を聞くと、大仰に肩を落としてみせた。

「いえ、ごめんなさい……!」

「ん、いいよ。歳からするとそう見えるだろうし。本当は従兄なんだけどね」

「……そうなんですか？」

「霊夢から従兄の話聞いたことはなかった。もどから、互いに家族の話を口に出すことは少なかった。早苗も母親を亡くしていて、どちらからともなく自然と家族の話題は避けるようになっていた。」

「……それで、あの……」

「まあ、察してるとは思うけど、霊夢ちゃんの話。ちょっとご相談っていうかさ」

その名前に、早苗は耳をびくりとそばだたせる。

「ちよっと立ち入った話になるんだけど、静かなところでお話できないかな？」

「すみません、こんな格好で」

境内から裏手に回った早苗の家。リビングテーブルの上に茶を置くと、早苗は仁の向かいに座った。

「いやいや、お構いなく。巫女さんなら霊夢ちゃんで見慣れてるし。……青い袴は珍しいけど」

「何かうちの神社の独特なしきたりがあるらしくて……見慣れない方は皆さん驚かれますね」

出された茶をすすりながら、仁は如才なく室内を見回す。建てられてからまだ、そんなに時間は経っていない

のだろう。開放的な印象を与えるよう、広く空間をとられたリビングダイニングだが、置かれたものは少なく片付いている。

「……今日は早苗ちゃん一人？」

「ええ……」

早苗はわずかに目を伏せる。

「……私も母を亡くしまして。父は忙しくて、あまり帰ってきませんし」

「そうかそうか。ごめん。立ち入ったこと聞いちゃったね」

深くソファにもたれて室内を見回していた仁は、眼鏡を指で直して視線を正面に座る早苗の方に向ける。

「さすが守矢の宮司さんのお宅だ、ご立派ですなえ」

「いえ……その……」

「お父さん、市会議員もしてらっしゃるんですっけ？ 次の市長選にも名前が上がるくらいだし、お忙しいでしょうねえ」

話の矛先が見えないまま、じっと黙っていた早苗が、いぶかるように仁を上目に見る。

「それで、お話って」

「煙草。大丈夫？」

「……灰皿がなくて。父の書斎にはあるかもしれませんが、私は入るなど言われていて」

「そう」

早苗は小さくかぶりを振る。仁は意に介した風でもなく紙巻の箱を内ポケットに戻し、代わりにスマートフォンをテーブルの上に置いた。

「じゃあ、本題に入ろうか」

「……？」

「霊夢ちゃんは元気にしてるよ」

ローカルの画像フォルダから写真を開くと、仁は画面を早苗の方に向けた。

「ちよつと厄介なことに巻き込まれてるけど」

「っ……っ？」

裸体。最初は何か、間違つたものを見せられたのかと思つた。筋肉質の男たちで押しつぶされるように、卑猥な言葉と幾何学的な文様を刻み込まれた小さな体躯が悲鳴を上げている。顔は手で覆い隠されていて見えなかったが、黒い髪の上で揺れる赤い髪留めは見まがえようもなかった。

「顔が見える方が分かりやすいかな」

仁の指が画面をスワイプする。画面の中の霊夢は苦しそうに男の性器を口に咥えこみ、別の誰かのペニスを手の内に握りこまされながら、それでも視線だけは抗議するように撮影者の方をにらみつけている。

「これは……どういうこと、なんですか？」

親友と、ためらいなく呼ぶことのできる数少ない……いや、たった一人の存在。それが今、ちいさな液晶画面の中で凌辱されている。

「違う……」

これは何かの冗談で、この画像は作りものだと言ってほしかった。

「違いますよね……？」

すがるような視線を向ける早苗に小さくかぶりを振ると、仁はネクタイを緩めてシャツの胸元を開けた。そこに見えたものの意味に気づいて、早苗は小さく悲鳴を上げ、ソファの上で後ずさる。画面の中の男と同じ入れ墨。

「そう、そこに映ってるのは俺」

「どうして……！」

「まず誤解しないでほしいんだけど、俺と霊夢ちゃんとの関係はあくまでも合意の上なのよ」

掴みかからんばかりの剣幕で怒りと混乱に眉を歪める早苗に、仁は訥々と論すように語る。

「……そもそも発端は、誰かが霊夢ちゃんを陥れて、ウチの神社を潰そうとしていることにあるわけですが」

静かに語りながら、仁は画面の上に指を滑らせて一枚、また一枚と、今度は別の誰かが映っている画像を表示する。

「役所やら企業やらに顔が利いて、利害のある神社関係者で、前々から虎視眈々とうちの神社を潰そうとしていた……これ、早苗さんのお父さんでしょ」

「……嘘だ……」

震える手で、スマートフォンを取り上げ、そこに映った顔に視線を凝らす。全部嘘だ。こんな言う男のことなど信じる必要はない。

「あ、最後の写真は地元の反社会的なアレの人たちと一緒に映ってるやつね。それが公になっただけでも一発アウト」

言い聞かせようとしても、勝手に涙がぼろぼろとこぼれてきた。知らない誰かと一緒に映る、知らない顔をした父。

「お父さんなかなかやり手でねえ、学校法人理事の立場を利用して、よそのエライさんに若い女の子抱かせたり

とか、まあ色々」

「……もうたくさんです」

スマートフォンを仁の方につき返すと、早苗はうつむいたまま膝の上で手を握りしめた。

「そんなものを私に見せて……どうしろと？」

「話が早くて助かるよ」

ポケットにスマートフォンをしまい込みながら、仁は内心の愉悦をにじませて口角をゆがめる。心根のしつかりした娘さんだ。霊夢と友達になるのもわかる。

「話をまとめると、君のお父さんが弱い女の子を神社から追い出すために寄ってたかって陰謀をたくらみ、その結果霊夢ちゃん俺に体を差し出す羽目になった」

「よくつながり、わかりませんが……」

「俺にはプランがある」

足を組み替え、ソファの背にもたれかかりながら、仁はつぶけた。

「十分な協力さえ得られれば、君のお父さんの企みを白紙にできる。そこでようやく話は本題に入る」

眼鏡を外すと、仁は指の間で目頭をほぐすようにしばらく揉んでいた。

「協力する気はあるかい？」

「協力……」

「まあ、だいたい想像の通りだ」

眼鏡を外したまま、仁は目を細めてじつと早苗の方を見ていた。嫌な目だ、と早苗は思った。左の両脇を走るように、小さな傷跡があるのに気付いた。かすかに引きつれたような瞼の間で、瞳が獲物を狙う狼めいて静かに輝いている。

「……私に体を差し出せ、と。そういうことですか？」

「尊厳、と言ったほうが近いかな」

冷ややかに言い放つ声に、細い肩がぴくりと震える。

「億じゃ効かないお金が動いてるからね。元手もなしで勝負するにはそれなりの覚悟が必要だよ」

千々に乱れてまとまらない思考の中で、ぐるぐるとたくさんの顔だけが入れ替わり立ち替わり、現れては消える。霊夢の顔。笑っている顔。小さな画面の中で、気丈にレンズをにらみつけながらも涙をにじませていた顔。父の顔。母が生きていたころの記憶。最後に父と面と向かって話したのはいつだっただろう。背中ばかりが浮かんで消える。

「……親父さん、こんなことしてると早晚足をすくわれるよ」

早苗の内心を値踏みするように、野犬の目をした男は言う。

「友達を助ける。親父さんには目を醒ましてもらう。親の因果が子に報い……なんてのは今どきはやらないが、まあ神社じゃもともと関係ないかな」

膝の上にひじを置いて腕を組みながら、仁は早苗の方に身を乗り出す。

「難しく考える必要はない。いま君の選択肢は三つ。一つ、何も聞かなかったことにする。俺はそのまま帰る。二つ、警察なり親父さんなりに電話して俺を突き出す。俺はブタ箱行き。それか……」

そこで呼吸を置いて、仁は向かいに座る少女の方を見た。

「俺を信じるかだ」

信じるべきではない、とわかっていた。いきなり現れて、胡乱なことを言い出す男。人の顔をまっすぐ見ながら、良心の呵責もなく嘘をつける類の男だ。自分が世知に長けた人間だとは思わないが、そういう人間がいることくらいは早苗にもわかっていた。ただ、そういう存在をいざ目の前にすると、何一つ言い返せない自分を予期していなかっただけだ。

仁にはわかっていた。彼女は首を振ると。そして彼女はそうした。

「君の部屋に案内してくれるかな」

二階の角部屋が早苗の部屋だった。早苗に続いて部屋に入った仁は、半ば放り投げるように携えていたショルダーバッグを置くと、あたりを見回す。趣味、興味、熱中しているもの……ポスターなり本なり、年頃の娘ならそういう物を部屋に張り巡らしているものだと思っていた仁は、いささか拍子抜けしながら、なにか住人の個性を表す物がないかと無遠慮に室内の様子に目をやる。きちんと整えられたベッド。机の上には学習参考書と教科書に並んで、神道と民話に関する本が何冊か棚に収められている。霊夢もそうだが、最近の子はあまり部屋にものおかないのだろうか。それとも学校が厳しいせいかな……。

「……これ、霊夢ちゃん？」

無言で早苗がうなずく。唯一、壁にコルクボードが掛けられた一隅だけが、年頃の少女らしい屈託のなさで飾られている。スマートフォンで撮った画像をプリントしたとおぼしきスナップが、何枚か色とりどりのピンで留められている。二人で映っているのは仁が手に取った一枚だけだった。あとは早苗か、霊夢かどちらか一人か、風景が映っているだけで、ほかの誰かが映っているものはなかった。

特別な友達。卒業して、年を経て歩む道が違っても、顔を合わせればいつまでも話に花が咲く。この二人はきつ

とそういう関係でいられただろう。なにごともしなければだが。ベッドに座ったまま、静かに唇を噛んで目を伏せている早苗を一瞥すると、仁は二人の姿が映った写真を裏返してコルクボードに留め直した。

「脱いで。下だけでいい」

「……」

「返事は？」

「……はい」

「下着もね」

ポケットに手を突っ込んだまま、コルクボードの写真を眺める仁の背後で、早苗は帯に手をかける。袴の折り目が崩れないように脱いだ袴を丁寧に畳むと、淑やかに閉じあわされた膝の間で、ふっくらと柔らかな下腹を包む年相応に可愛らしいショーツが現れる。

「……っ」

顔をうつむけたまま、早苗は意を決してショーツに手をかける。片足、また片足と袴から足を抜く間に、噛みしめた奥歯がこめかみのあたりを鈍く軋ませる。

「……脱ぎ、ました……」

へそれから下は何も覆うものがないまま、早苗はベッドの上で裸身をさらけ出す。両腿と下腹の織り成す柔らかな三角形の突端で、頼りなげに繊毛がエアコンの風に震えている。自分のベッドの上で、男に体をさらけ出しているという事実が、否応なく少女の意識にこの次に起こることを予感させる。知識では知っていた。クラスの中でも、誰がしたとかしていないとかいう話は流れてくる。自分もいつかはするものだど覚悟していた。それが、こんな形で？

「早苗ちゃん、処女だよね？」

「え……あつ、はい……？」

親し気な笑みを口元に浮かべながら、仁が振り返る。わかって聞いている、そんな気がした。

「安心してよ。今日はそこまでではない。そこまでは……ね」

見透かされている。考えていることも、この緊張も。

「じゃあ……なに、を……？」

何をさせられるのか。断片的な性知識がぐるぐると頭の中を巡る。口でさせられる？ おっぱいで何かをする、という話を小学校の頃に男子がしていた記憶があるが、早苗の胸はあまり大きいほうではない。自分の想像の中で不安を膨らませている早苗をよそに、仁はバッグから何かを出してベッドの上に並べだした。

「手を付いて、お尻こっちに向けて」

傍らに並べられたいかがわしい道具の正体をいぶかる間もなく、仁が命じた。言われるがまま、早苗はベッドの上で向きを変え、仁の方へと尻を突き出してうずくまる。

「ん、もうちよつと足開いて」

肩幅に膝を開かされたおかげで、ふっくらとした尻たぶの間でしとどに濡れて揺れる繊毛も、秘めやかに閉じあわされた秘唇の、肌色と粘膜の境目も、その上でなまめかしく息づく秘蓄も、少女の繊細な自意識が覆い隠そうとするすべてがさらけ出される。

「ッ………！」

羞恥と屈辱に早苗が背中を震わせていると、仁の手が骨盤のあたりを抱え込み、思いもかけない行動に出た。

「なっ………なにっ………？」

「何されてるか、言ってみなよ」

弾かれたように首を巡らして背後を振り返る早苗に、仁は埋めていた尻の谷間から顔を離して正面から視線を返す。

「何って………そこ、お尻………！」

「そう」

短く答えて、仁は再び尻の谷間に舌を伸ばした。熱く濡れた舌のざらついた表面が、窄まった粘膜の皺を一つ一つ丹念に伸ばすように這いまわる。下半身から伝わる今まで味わったことのない異質な感触に、早苗は背筋を震わせて喘ぐ。

「なんで……あつ、そんな、きたなっ……」

「そう、汚い。お尻の穴舐めるなんて異常だよね」

「ひぎっ……」

再び仁が顔を離すと、舌の代わりに指が輪郭をなぞるように肛門に触れた。

「でも、汚いことって気持ちいいんだよね……早苗ちゃんみたいな清纯で可愛らしい子が相手ならなおさら」

「なんで……お尻、なんて……はうっ」

つぶりと指の腹までが肛肉の中に沈む。早苗は仁のしようとしていることによく思い至って、目を見開く。

「まさか……」

「ん？ 早苗ちゃんBLとか読まない？ まあ俺はあんま読んだことないけど、おしりにチンチン入れるのは普通でしょ？」

男同士が体を重ね合うたぐいの本や漫画を読んだことがないわけではなかった。けれど、あくまでもファンタジーだと思っていた。あるいは男同士だけの世界の話だと。

「……怖くなっちゃった？」

ぎゅっと肩をこわばらせる早苗をあやすように尻を撫でると、仁は同じく固くこわばった肛門から指を離し、再度舌を這わせた。

「んんんっ……！」

「大丈夫、無理やりしたりはしないから」

広げた手のひらで撫でるようにやんわりと尻たぶを掴んだまま、仁はしゃべる合間に舌で不慣れな肛門を責め立てる。指で押し広げられるのには固い抵抗を示した尻穴も、それ自体意志を持った生き物のように生暖かく這いまわる舌にくすぐられるうちに、少しずつ緊張が緩んでくる。

「……気持ちいいって言ってみて」

「いっ……」

尻穴から腰のあたりへと、くすぐったいような、むず痒いような、奇妙な感覚がぞわぞわと立ち上ってくる。その一瞬の弛緩を見逃さず、尖らせた舌が括約筋を割り広げて腸の内側へと侵入する。

「ひうっ……ひっ、気持ちいい……ですっ！」

「何をされて？」

「……舐めていただいて、気持ち、いいっ……です……」

「どこを？」

「お尻のっ、穴っ……」

まるで語学の練習でもするように、一言一言口に出した言葉が早苗自身を酔わせていく。仁がしゃべれば卑猥な口上を復唱させられ、そうでなければ尻穴にねじ込まれた舌が粘膜をこすり立て、意志とは裏腹に無理やり排泄させられるような異常な感覚を脳に伝えてくる。その奇妙なルーティンを繰り返すうちに、早苗の脳の中で言語と感覚が結びつく。

「う……うっ、うんちする穴、舐めていただいて……気持ちいい……です……！」

「そう、うんちする穴」

満足げにうなずくと、仁は顔を離して口元を拭った。

「今日まではね」

「ひっ……？」

仁が手に取った道具を見て、早苗は息を呑む。鈍い艶消しの黒色をしたその物体の名前はわからなかったが、用途は想像がついた。

「そんなのっ……！」

「入るさ。早苗ちゃんには素質がある」

息を継ぐ間もなく、仁は鈍く光を照り返すプラグの先端を肛門の先端に押し当てる。そのまま、手のひらで押し込むようにしながら、大粒のイチゴくらいの大きさをしたシリコンの塊がゆっくりと筋肉の輪を押し広げながら、ゆっくりと腸の中へとめり込んでいく。

「体をぺたんこベッドに預けて、そう。あとはゆっくり、ゆーっくり、息を吸って、吐いて……いいよ、上手」
痛い、というよりは、じりじりと痺れるように熱く、苦しい。圧迫感に責めさいなまれる脳に、麻薬のように染み渡る言葉のまま、早苗は浅く、深く、息みはじめ。

「ひう……かほっ……うふう……んっ、んんっ……んっ！」

一番太い部分が肛肉を押しとおると、あとはあつけないものだった。一息にプラグが根本まで呑み込まれる。背骨の底を叩くような衝撃と、ひり出しかけた便がそのまま滞っているような、むず痒い排泄感。

「……今度は……なに……？」

苦痛と屈辱に唇がゆがむ。涙を浮かべて振り返る早苗の背後で、仁は黒い皮のベルトのような物を手にしていた。

「嘘……」

何をされているのかわかっていても、澀んだ頭ではそれだけ口にするのがやっとだった。手際よく、仁は早苗の腰と脚に回すようにベルトを巻き、ぱちりと金具を留める。

「これ……これじゃ……」

「そう。うんちできないねえ」

早苗が肩越しに振り返る視線の先で、仁はスマホの画面をタップした。

「俺の許可なしには」

「ひあっ……あっ、あっ！」

低いモーター音とともに、肛門を塞ぐプラグが振動を始める。

「動作ヨシ、と……最近のガジェットはよくできてるねえ。振動からロックの開閉までリモート操作可能」

「どうして……」

背中から脳天まで揺さぶられるような振動が止むと、早苗は目を伏せたまま、ぼつりとつぶやく。

「どうしてこんなこと……?」

男は笑っていた。人を辱めて、いたぶって、何が楽しいのか。これが、男と女のすることなのか？ それじゃあ、まるであの人たちと……同じだ。

「尊厳を差し出してもらう、って、俺言わなかったっけ？」

「あう……」

端末をポケットにしまい込むと、仁は早苗の脇に腕を差し込むようにして、ベッドの上に体を起こさせた。
「……ただ股を開いて終わりってわけにはいかないのよ」

緩めたズボンの前開きから、こもった汗の苦酸っぱい臭気を放つペニスがまろび出る。根元から先端まで、早苗の顔よりもあるだろうか。初めて間近で見せつけられる、勃起した剛直の生々しさに、早苗は眉を引きつらせる。

「こ、これを……」

鼻先に突き付けられた男の性器を直視することができずに、早苗は目を逸らす。かと言って目を閉じることもできなかった。

「どうすれば、いいんですか……」

「……別に。今日は見るだけでもいい」

先走りを浮かべて震えるペニスを横目で眺める早苗に、仁は想定外の一言を放つ。

「ただ、ここで早苗ちゃんがお口で俺を気持ちよくしてくれれば、その分今晚の霊夢ちゃんの負担が減る」

その名前を聞くと、ぴくり、と早苗は耳を震わせた。

「早苗ちゃんは賢いから理屈は分かるね？ どうする？ やり方がわからないなら教えてあげるけど」

身勝手の理屈ではあったが、身勝手のその論理に付き合う他なかった。仁に見せられた霊夢の写真。今なら何をされていたのか理解できる。前から後ろから、この太いペニスをねじ込まれ……プラグをねじ込まれたままの尻穴が、じんと鈍く疼いた。目の前に突き付けられた男性器に比べれば、小さなこのおもちゃでもこれだけ苦しいのだ。それを……。

「……やります」

霊夢のことを思うと、勝手に答えの方から口をついて出た。

「教えてください」

「はいよ」

勝ちを確信した笑みを浮かべて、仁はうなずく。

「まず口を開いて、先っぽを吸う」

こくり、と細い喉が揺れる。やがて早苗はつややかな唇を、赤黒く怒張した亀頭へおずおずと触れさせた。

「んっ……」

「そう、いいよ」

「んむっ……んんっ」

ためらいながらもベニスに口づける早苗の後ろ髪を梳くようにして、仁はうなじのあたりに手を添える。

「先っぽのその膨らんで赤くなってるあたりが、一番敏感なところ。本当は全部口の中に入れてもらうといいんだけど、それはおいおい。ちよつと大きいからね」

何の銜いもなく言つてのけると、仁は首筋に添えた手を抱き寄せるようにして、早苗の顔を肉竿の側面に向ける。

「……一番気持ちいいのは先っぽだけど、サオのところとか、根元……袋のところとかも気持ちいい。うん、上手上手」

仁に言われるがまま、早苗はちろちろと肉竿の側面から根元、そして舌を這わせていく。肉々しいような、塩辛いような後味が舌尖に絡みつくが、口の中に溜まった唾液で飲み下す。必要なことなのだと自分を納得させてし

まえば、耐えられないほどに不快ではなかった。

「まずはそのくらいでいいかな。口を開けて、舌を出して」

「ほう……でふか……？」

「そうそう。唇を歯に当てるようにして、歯が直接当たらないように」

広げた唇の半ばほどまでペニスを押し当てると、仁は早苗の手のひらに脈打つ肉竿を握らせる。

「ちんちんはある程度の速さで動かしてあげないとイケ……射精できないんだ。最終的には全部口だけでできるようになってもらうけど、まず手を使ってペニスをつかんでみて」

おずおずと、早苗は握った手に力を籠める。唾液でぬめる肉竿にはそこかしこに脈打つ血管が浮きたち、触れると意志を持った生き物のように手の中で跳ねる。湯気が立ちそうに熱いペニスをおっかなびっくり握りしめ、前後に動かし始めると、やがて仁は早苗の手を覆うように握った。

「ん、もうちょっと早くしていい」

早苗の手を握ったうえから、仁は己の逸物を手で激しくしごき立てる。口の端から細く息をしながら、早苗は目の前で繰り広げられる光景に目を白黒させる。こんな速さでごりごりとこすり立てて、痛くないのだろうか。自分のあそこがこんなふうに責め立てられたら……いや。それ以上に、体の中にペニスを受け入れるということ

は、この勢いで揺さぶられるということだ。尻穴にねじ込まれたままのプラグを不意に意識して、早苗は眉をかめる。

「んん……いいねえ……早苗ちゃんのおてて……柔らかくて、すべすべで……気持ちいいよ……」

「んっんっ、んんっ……んむっ……」

早苗の手越しにアレグロの速さでペニスをしごかせながら、仁が悦に入ったように息を漏らす。早苗は舌と唇の間で剛直の先端を受け支えながら、舌の上に塩辛い味が広がるのを感じていた。手でしごき立てられ、泡立た唾液が口の端に絡む。

「んー……そろそろ出るから、口の中にツバ、溜めといて」

「んぐっ……？」

「……出すよッ」

衝撃に身構える暇もなく、口腔いっぱいに生臭い汁が吐き散らかされる。口を開けたまま、歯を立てないようにこらえるのがやっとなかった。射精の瞬間ぎゅっと目を閉じた早苗の口の中を、竹の皮をはいだような青臭い匂いと、苦いような塩辛いような、奇妙に絡みつく粘液が二度三度と脈動しては汚していく。

「んっがっ……んぐッ！」

喉奥にまでたたきつけるように放たれるそれを、吐き出さないようにようやくのことで呑み込む。いや、流しこまれたと言ったほうが近い。

「まだだよ。先っぽを吸うようにして、残ってるのもきれいにして」

「ん……じゅるっ……んむっ……」

おしっこが出る穴。その事実を意識しないように尿道口を吸い立て、残った精液を唾液とともに嚥下する。いながらっぽい体液が喉に絡まりながら胃に落ちていくと、早苗はベニスから口を離して小さくむせ込んだ。

「けほっ……うえっ……」

てらてらと光る抜き身を晒したまま、仁は悠揚迫らぬといった体で早苗の呼吸が落ち着くのを待つ。やがて呼吸が整うと、仁は早苗の顎を掴んで自分の方を向かせた。

「それが男の、いや……俺の味だ。忘れないようにね」

「うう……」

「言ってみて。『精子、美味しいです』って」

「せっ、せいし……」

熟していない果物を食べたときの舌がピリピリと痛んだ。それ以上に、先端だけとはいえ口を犯され、

なぶられたせいで唇が痺れてうまく回らない。鼻に染みついた匂いが、否が応にもたつたいま男のペニスに奉仕させられ、精液を飲まされたという屈辱を思い起こさせる。

「精子、美味しいです……」

涙がこぼれ落ちそうになるのを押さえて、早苗は口上を述べ立てる。

「……おじさま」

「おじさま、か」

最後に付け加えた一言は、早苗なりのせめてもの反抗のつもりだった。

「いいねえ。その呼び方、気に入ったよ」

仁に口淫奉仕させられた翌日。早苗は休むことなく学校に来ていた。休もうかとも思ったが、休んだら負けのような気がしていた。制服のスカートの下で、昨日つけられた尻の貞操帯は気味悪いほど静かにしていた。前の方は開いているから小用は足すことはできたし、風呂にはいることもできたが、排便の自由を奪われたままであることはいかんともし難かった。

「くっ……」

塞がれた尻のことを意識した瞬間、きゆるきゆると腹が不穩に鳴った。深く息を吐いて、蠕動する腸のざわめきをやり過ぐす。幸運なことに、しばらく息を吐いているうちに腹部の違和感はおさまった。そんな調子では授業に身も入ろうはずもない。外を眺めて気を紛らわそうと窓の方に目をやると、空いたままの席が視界に入った。ため息が漏れる。

(霊夢……)

霊夢はやはり来ていない。今頃あの男に何かされているのだろうか……。

午前中の授業をようやく乗り切ると、早苗は教室を出て階下に降りた。食欲がないので弁当も作っていない。せめて昼休みの間ぐらい、保健室で横になろうと職員室の前を通りがかった瞬間、恐れていた「あれ」が訪れた。

「……どうしてっ」

腰に力が入らなくなる。壁に寄りかかるようにして、尻穴から伝わる振動を必死でこらえる早苗の視界に、信じられないものが映った。

「どうしてあの人が……学校にッ……!」

廊下を歩きながら学年主任の女性教諭と和やかに話していた仁は早苗の姿を認めると、にこやかな笑みを浮か

べながら近づいてきた。

「ああ、こんにちは。早苗ちゃん」

「……あれ？ お知り合いでしたか？」

仁と話していた教諭が二人の顔を交互に見やる。

「ええ。うちの霊夢ちゃんとは仲良くしていただいてるみたいで。今日はちょっとお休みで残念ですが」

「本当にねえ、お大事になさってください」

「え、ええと……どうして……おじさま……が？」

顔が引きつりそうになるのを無理やり抑えて平常心を装いながら、早苗は尋ねる。いくら保護者とはいえ、女子校に昼日中から男が一人うろうろしているのはいかにも不自然だった。どうやって潜り込んだのか。いよいよ「あー、うちの祖母ちゃん、もともとこの学校の理事だったでしょ？ まあ名前だけなんだけど、代々やってたらしくって」

……思い出した。霊夢の祖母は生前、この学校の理事会に名前を連ねていた。霊夢はその話をしながらなかったし、非常勤の理事を学校で見かけることもなかったの、そのことを知ったのはエスカレーターで内部進学した後だったの。

「んで、亡くなつてからしばらく空席だったのが、俺にお鉢が回ってきたつてわけ」

「それで今、校内をご案内していたところなんですよ」

この男が理事？ さつと顔を蒼褪めさせる早苗をよそに、教諭は訥々と語りつづけていた。

「大学では心理学をご専攻されたとか？」

「ええ、まあ。昔の話ですが。最近ではスクールカウンセラーの配置も進んでいるとか」

「……そう、本校にも非常勤ですがカウンセラーの……どうしました東風谷さん？ あまりお客様に失礼があったりは……」

そういえば、話の長い先生だった。我と我が身の不運を呪いながら、早苗はぐるぐると下腹がうずくのを必死でこらえる。早苗自身をこのような不快な状況に追い込んだ本人が目の前にいて、何事もなかったかのように先生と話している……その異常な緊張感にきりきりと胃の下あたりが差し込むように痛んだ。いよいよ、下腹に溜まった膨満感が抑えがたくなってきていた。いっそ漏らしてしまうことができれば楽だったかもしれない。しかし、今の自分はそれすらも許されない。

「先生、失礼ですが」

早苗がスカートの裾を握ったまま、青ざめた顔をうつむかせていると、思いもかけず仁の方から助け舟を出し

た。

「東風谷さんはどこかへ急いでおられたのでは……女性の前で恐縮ですが」

「あら……ごめんなさいね東風谷さん。では私たちはこれで」

そそくさと歩き出す教諭を追って、仁もまた早苗の背後方向へと歩き出す。

「……外してあげたから、行っておいでよ」

「！」

すれ違いざま早苗の肩に手を置くと、仁は早苗だけに聞こえる声量でささやき、廊下の角へと消えていった。

早苗が手洗いをすると、スマートフォンにメッセージが入っていた。

「カウンセリングルームで待ってる」

カウンセラー室の鍵は開いていた。カウンセラーの勤務日でないので、今日は鍵がかかっているはずだ。本来なら。

「やあ。すつきりした？」

仁が待っていた。他には誰もいない。プライバシー保護のために、窓にはいつもカーテンがかかっている。仁に

はもってこいの場所だ。どうせうまいことを言つて鍵でも借りたのだろう。

「まあ、大学時代に心理学とかかかじつてたのは本当だよ。CSRとかPSYOPSとかそっちの方面だったけどね」

「……こんなところに呼び出して……」

「俺の方からトイレにお邪魔するのも気が引けたからね」

「……これ」

ペーパーの上からハンカチでくるんで持ってきた貞操帯を、突き付けるように差し出す。

「つけ方がわからなかったの、そのまま……です」

用を足すために、自らひり出したプラグ。トイレの中で切羽詰まったまうまく取り出せなくて、カリカリと指を滑らせていた己のみじめさを思い出すと、涙がにじんできた。

「ん。良く持ってきてくれたね。もう嫌になって、そのまま来てくれないんじゃないかと心配したよ」

「そんなことはしません……!」

静かに。しかしはつきりと、早苗は吠えた。

「逃げたりなんて……もう……」

「きみと霊夢が友達になったきっかけ、当ててみせようか」

「……？」

いつになく直截に感情を吐露する早苗に、仁はひるむでもなく、揺らしていた椅子の動きを止めて指を顎に当てる。

「早苗ちゃん、イジメに遭ってたでしょ」

「……！」

「そこを霊夢ちゃんに助けられた。そんなとこかな」

「……どうして……」

「安心して。霊夢ちゃんからは何も聞いてないよ。俺の推測。まあ、子供って残酷だからねえ。片親、親がいない、家がちょっと変わった仕事をしている……そんな些細な違いでも諍いの種になるものさ。まあ、そんじょそこらのモヤシが何人束になっても俺の霊夢ちゃんに敵うはずがないんだけど」

仁は笑って椅子を降りたが、その笑みは目元まで届かない。しかしいつもの挑発するような調子とは違って、そこにはほのかな寂寥がにじんんでいるように、早苗には思えた。

「なんせ、一時期とはいえ俺と一つ屋根の下で暮らしてたんだよ？」

カーテン越しの明るい陽光を背にしたその顔は、逆光になってよく見えなかった。目を細めて見上げる早苗の眼前に、仁は何の銜いもなくズボンから取り出したペニス突き付ける。

「さて、早苗ちゃん。何か言うことは？」

「う……」

鼻先で匂う雄の臭い。早苗はペニスから目を背けて、言葉を継ぐ。

「うんちを……させていただいて、ありがとうございます」

「よろしい。次は？」

「おじさまのペニスに誠心誠意ご奉仕させていただきますので……つ、拙い口技ではありますが……おたのしみ、ください……」

「うむ」

仁は静かにうなずくと、侵入者を迎えるべく舌を出して待ち構える早苗の口腔に怒張したペニスの先端をねじ込んだ。

「昼休みが終わる前に済ませよう」